

## No.81 岡本 敦生 「黄色の種類」

Atsuo Okamoto

北川フラムさんのコラム / 1998 (平成 10) 年 3 月 1 日付 立川市市報記事より

岡本さんは、石を使ったパブリックアート作品を数多く創ってきたアーティストだ。崩れたり、切り取られながら大地と関わっているところに特徴があり、その作品は、石が大地から切り出される瞬間の初源の姿を思わせる。

2つの車止めとして置かれているこの作品は、石とブロンズでできており、柩のようにも見える。あたかも古墳から出てきた石と真鍮のようでもあり、どこか遠く、なつかしい風景を思い起こさせる。それは、遊び疲れた子どもが、家路の途中に見た岩や山かもしれないし、木々であったかもしれない。

子どもの頃見た、黄昏時の一面に咲く月見草の黄色い花の記憶に重ねながら、作家は、都市空間にたたずむこの作品に、「黄色の種類」というタイトルをつけている。

作家のメッセージ / 日本住宅公団 (現 : UR 都市機構) 「ミニ通信」より

10年ほど前になるのだが、オランダのある町の街角でその街の景観とは明らかに異質な、少し湾曲した直方体が、道路わきに立っているのを発見した。

高さは 2.5m くらいであり大きくはない。薄汚れたコンクリート製で表面にはかなり大胆な構図で彩色が施してある。どうも気になるので雑踏をかき分けて側に行ってみることにした。

彫刻のような絵画のような不可思議な空間を持った物だという事がわかる。

もしや作家のサインがあるのではないかと思い、探してみたところ、下の方にパブロ・ピカソと書いてあった。

近年日本でもパブリックアートという事で街中に多くの彫刻を見かけるようになった。そして、設置する環境や景観を考えて彫刻を作るという事も、盛んに言われているようである。

私は最近そういう彫刻の作り方に疑問を持ち始めている。

純粹に彫刻を作りたいという欲求と、街の景観やシナリオをポジティブに考えていく事が、私の思考の中で一つになってこないからである。

環境やシナリオを意識すればするほど、彫刻が弱くなっていくような気がする。できれば最初から最後まで自己の表現に没頭したいと思っている。

今回の「ファーレ立川」プロジェクトでは私は車止めの彫刻という設定である。

石と真鍮とを組み合わせる予定なのだが、道路脇に物があれば、それは必然的に車止めになるという認識で今は彫刻の事だけを考えている。

街の雑気で私の彫刻が薄汚れ、風化してくるだろうことを夢見ながら、かつて見たピカソの作品も、考えてみれば車止めの機能を持っていたことを思い出している。